演題番号：D10

犬の脳幹部腫瘍に対する外科的アプローチの３例

○井尻篤木[1) 2)]，坪居穏佳[1) 2)]，井上克徳[2)]，寺田康平[2)]，山田寛生[2)]

[1)] 日本動物脳神経脊椎センター・大阪市，[2)] アツキ動物医療センター・滋賀県

1. はじめに：我々が遭遇する脳幹部での脳腫瘍において、脳実質外腫瘍としては、髄膜腫や末梢神経鞘腫などがあげられます。これら脳腫瘍が存在する脳幹部へのアプローチの進入ポイントは、腫瘍表面で切開を加えることである。腫瘍を直接露出できれば、脳実質に障害を与えることなく、腫瘍のみを摘出することが可能である。今回我々は脳幹部の、それぞれ異なった部位に存在する脳腫瘍に、あらゆるアプローチを試み、腫瘍摘出に至った症例を供覧する。

2. 材料および方法：症例１はボーダーコリー、８歳、雄　症状は、左旋回、四肢不全麻痺が認められた。MRIで脳幹部腹側傍正中に腫瘤病変が認められた。症例２はゴールデンレトリバー、９歳齢、雌、昏睡状態で来院。右側脳幹部に腫瘤病変が認められた。症例３はチワワ、雄、12歳齢、前庭障害を呈し、左側において脳幹部頭側でテント直下に腫瘤病変が認められた。手術は、症例１は口腔内から経底後頭骨開頭術、症例２は経側頭骨開頭術、症例３は経側頭骨開頭術からテント切開経由して、それぞれの腫瘍にアプローチした。

3. 結　果：３症例とも腫瘍表面に無事アプローチできたが、完全摘出にいたらなった。症例１は髄膜腫で、症状は完全に改善し、放射線治療を併用することで５年生存した。症例２は悪性末梢神経鞘腫で、手術は無事終えたが、症状は改善することなく残念ながら術後１日で死亡した。症例３は悪性末梢神経鞘腫で、症状の斜頸はやや改善したが、術後50日で死亡した。

4. 考　察：脳幹部腫瘍に対する腫瘍摘出は困難であるが、今回行ったアプローチにより、脳幹脳実質外腫瘍の外科的縮小または生検は可能であった。症例を重ね、より有効なものとしたい。